

SSKW

海から海へ

No.25 2010.10.2

【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ
〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5
マートルコート調布407
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



工藤静香 KUDO Shizuka 500x320 1988 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

もうひとつの美術館にて

「花と月と時と...展」の旅

3月から5月にかけて、上記展覧会が行われました。

この場所は栃木県那珂川町にあります。明治から大正にかけて小学校だった建物を町から借り受け、もうひとつの美術館として障害を持つ方々の作品を展示するため開館されました。

まわりは麦畑。閑静な場所に古い建築。一見、通り過ぎてしまうほどです。古びた空間に人間のこころを表した作品がとてもマッチしていました。瑞木を含む4人の作家の作品を前にすると、自身の精神が浄化されるように思います。自分の気持ちがある一定の高みにもち上げられるような感動です。



もうひとつの美術館

以前より訪ねたい場所の一つでした。今回出品の機会に恵まれ、瑞木は初めて訪問しました。1回目は3月の黄砂が舞う日。日帰りでしたので、急ぎ旅。帰途、宇都宮へ。かの有名な餃子も賞味し、初めての栃木の旅を楽しみました。

2回目の訪問はグループホームの仲間と一緒にバスに乗って行きました。

到着すると、出迎えてくださったのは女子美術大学の学生さんと先生方でした。作家に握手やサインをしてもらい、学生さんたちから歓声が上がりました。田中瑞木はびっくりです。

館長の梶原紀子さんと一緒に女子美術大学の小川先生と木下先生ともお話をする機会がありました。女子美術大学の卒業生はアートを通じた仕事により、全国で障害の方々とかかわっているのだそうです。



小川先生と梶原紀子館長との談笑

アートはこころの深層と関係があります。アートに触れ、自分に触れ、こころに届き、癒され、大切にとすること。アートが人々の気づきとなって広がってきているのを強く感じました。

グループホームの仲間とは、その後大洗海岸へと足をのぼしました。太平洋を見るのも久しぶりでした。大きな大洗水族館では、それぞれが水中の生き物を間近にし、驚きの体験をしました。前日の温泉では普段シャンプー嫌いなM君が気持ちよさそうに自分でごしごししている姿を目の当たりにし、男性の方々は全員感動の面持ちでそのことを女性陣に話すのでした。

こころが何の妨げもない時、人は気持ちの良いことをするのでしょうか。「こころを解き放つことは重要だよ」って、M君から教えてもらったようでした。

旅はいいですね。

(阿部愛子)



展示室へ向かう廊下



大洗海岸にて鯛の群泳にびっくり

最近のこと

皆様、いかがお過ごしでしょうか。

猛暑続きの今夏、ようやく秋を迎えることができ、ホッと一息ついている今日この頃です。

さて、しばらくぶりのお便り発刊です。

最近のことをいろいろ記してみようと思います。

7月、富山県滑川市へ行きました。日本海沿いに走る北陸道では26のトンネルを通過します。毎年、親子知らずのトンネルあたりで亡き母を思い出します。

夏の帰省のたびに食卓に出された水茄子の漬物、枝豆、キスのてんぷら、スイカなどが目に浮かび、娘の帰りを心待ちにしていたら母の思いを今もありがたく思い起こします。

原宿に新潟県内の物産を扱う「ネスパス」というアンテナショップがあります。先日、アートセラピーに使うブロッククレヨンを手に入れるためクレヨンハウスに行ったついでに、娘と立ち寄りしました。

そこに母が手作りし送ってくれた笹団子や笹ちまき、晩秋から初冬にかけ信濃川を遡上する鮭の味噌漬、春夏秋冬の漬物など多くの懐かしい食物が並べられていました。私の郷愁をそそりました。

母の手料理は母が私に伝えた文化です。いまでも私の記憶に強くあります。その反面、私という母親が伝え残すものは何か、そしてそれは残るのだろうか、だれに渡せるだろうかなど、複雑な思いが湧いて来る中、自分の年齢を母と重ねて見ている自分に気づき、年月の歩みの速さに驚きました。

友人のOさんが脳梗塞で入院中です。3回お見舞いに行きました。発作から3カ月経ちましたが、歩行できず、食欲が落ち、胃ろうの手術を勧められていると聞き、驚きました。

人間が食物を摂取できなくなると、栄養を点滴で補います。さらに胃に穴をあける必要性を医師が説きます。それが本当に必要なかどうか、疑問が残ります。

時間をかけることで、あるいはご本人の負担やストレスを軽くすることで、食事ができることも多々あるのではないのでしょうか。本人の意に沿わない方向へ行こうとしているのは、ケアの担い手つまり看護師やケアワーカー不足に原因があるのでしょうかと思えません。

Oさんは一人暮らしです。家族がそばにいれば事態に変化が生じたのではないのでしょうか。家族がいない場合、病院や施設でケアしてもらうという実態は厳しいものであるかもしれないと伺い知りました。背中が寒くなります。

もっと自己主張をするべき。もっと情報を得るべき。もっと手厚くするべき。もっと察するべき。もっと優しくするべき、などなど、思うことはたくさんあります。日本中に大勢の方がいらっしゃるのだらうと思い、娘の顔を見てしまいます。本人の意向が伝わるといことがとても難しい、ということに改めて思います。

言語ではもちろん非言語のコミュニケーションの重要性を、ケアの現場でもっと学び活かして欲しいと思います。いろいろ考え、変えていかなくてはと気持ちが急いできます。私達全員の問題です。

9月初旬、仙台の学会に参加し、学会の合間に、同行した家族と良い旅ができました。

43年前、私が高校生の時、父母と新潟から山形、宮城、福島、東京を回る旅をしました。しかし、私は暑気に負け、山形県山寺では立石寺に上らず、ひとり芭蕉の句碑の前で時間をつぶしていたという苦い経験がありました。今回はぜひ1015の階段を上り、父母と同じ景色を見たいと思い、夫と娘に見守られながら、私は目的を果たせました。

上からの風景は素晴らしく、俗界遠いこの地に多くの仏僧が修行に励んだ姿を想像し、澄んだ初秋の風に当たりながら、私は自らの仕事の道を深く掘ることに意識を向けました。

電話相談の仕事から10年の時間が流れました。初心に帰り、新たな気持ちで自分のできることを誠実にやっていきたいと思っています。私事ながら、今秋、節目に当たる還暦を迎えました。



山寺1015段のX段目

娘は旅行が大好きと言います。旅行の予定があると表情が明るくなります。毎日の会話はそのことで弾みます。先のことを心配する、不安になるという自閉症の特性により、長い間親子でそのことに悩み、苦勞をしてきましたが、その昔からは想像できない現在の娘の様子です。

言葉で説明しても理解することが難しい幼児期から成人期の初めにかけて、私たちは数知れないバトルを繰り返しました。私の心身はぼろぼろでした。髪は娘の腕力により抜け、腕はつねる行為であざだらけ、首は後ろから不意に力いっぱい押されむち打ち症状、心はいつパニックが起こるかどうかを恐れる有様でした。今考えると、あのころ私が日常と実感していたものは非日常だったのではないかと。当時の私のねがいは、「平凡で変化のない生活をしたい」でした。

20歳を過ぎたある日、暴れる娘を前に「あなたなんかいない」と、我慢できずとうとう暴言を吐いた私は深い後悔をし、自身を痛めました。その時、娘の主治医佐々木時雄先生は私を責めるでもなく、「とうとう言いましたか」と肯定的に私を受け止めてくださいました。

あの時の救われた思いが、私自身のこころの基地をつくるきっかけになりました。何があっても自分をダメと思わないで生きていけば、良いことにつながっていくのではないかと、自分を信じる気持ちになりました。そのことが援助の仕事に就く大きな励みになったと思います。

私からひどい言葉を言われた娘は、その後別人のようになりました。パニック症状は姿をほぼ消しました。娘は言葉によるコミュニケーションで、物事の仕組みや経過を以前より理解するようになりました。

「いつになったらパニックは終わりますか？」とよく質問を受けます。10年以上前に、20年以上娘を育て付き合ってきた中で、私なりに考え着的なことがありました。娘の脳内では、娘が生きてきた20数年の年月により、多くの言葉や行動すべてを含んだ体験があります。ばらばらだったそれが全体を包含するように統合された形になってきたのではないかと。それが物事を理解できることになり、娘のこころに平安をもたらしているのではないかと。

私の話を聞き、「松島のように島が海にぼつぼつある状態から、潮がひけた時に台地がつながって見える状態になっているのでは」と臨床心理の恩師佐藤誠先生はおっしゃいました。

ばらばらであった事象がまとまりをもつことが、人のこころに安寧をもたらすとしたら、やはり、手間をかけ、たくさんの経験をするには意味深いと考えます。娘が旅好きなのは娘の発達への欲求だったと思います。人はみな死ぬまで発達続けているということを忘れないで、丁寧に娘を始め多くの人とかかわっていきたいと思います。

「みーちゃん、次はどこへ旅行に行きたい？」私たち家族の最近の会話の一つです。

今回の旅のハイライト松島湾をめぐる船では、栃木県佐野市の生コンクリート関係の会社の方々とご一緒しました。その中のお一人が娘にカモメの餌（カップエビセン）をもたせてくれて、娘は初めてカモメの餌付けを経験しました。



松島で遊ぶ

恐々と手を伸ばす娘。その指先の餌を目指しカモメが必死に羽ばたきながら、ようやくたどり着きます。口にするときびすを返し、また餌まで羽ばたきを繰り返します。娘がカモメをこんなに近くで見たのは初めてでしょう。(私は日本海の端で育ちましたので、よくカモメを見

ていました。

先日、娘はその光景をスケッチブックに描きました。油絵にするかどうかはわかりませんが、私は楽しい気分にはさせられています。いつか皆様にもご覧いただければと思います。

皆様、またお会いできるのを楽しみにしています。
どうぞお元気で。 (阿部愛子)

最近のできごとから

最近の2つのできごとと、そのことから私が考えたことを書いてみたいと思います。

1. Mさんの一般就労

自閉症の障がいをもつMさんは、老人ホームでお茶碗洗い、トイレ掃除など建物内清掃、洗濯物をそれぞれの利用者さんごとに畳むなど、家事サポートスタッフとして働いてきました。そんなMさんは4年目を迎える頃、イライラして、口数が増える、涙が出る、月曜日はブルーな気分になる、ということがよくありました。

Mさんは、感じていること、考えていることを人に伝えることがあまりうまくありません。人は気にされている、大事にされていると実感できると幸せに思います。彼女は職場で気にされていない、大事にされていない、そんな中で仕事をするのはたいへん、と訴えているのではないかと私たちは思いました。そこで、そのことを彼女の職場のホーム長さんに話しました。

話の中で、職場では、職員さんみんながたいへん忙しく、余裕がなく、お互いの交流があまりないことが分かってきました。Mさんの感じていることは職場の人たちも感じていることで、皆さんはあまりに忙しく、お互いに挨拶する時間もないようでした。そういう状態では利用者さんも他の職員同士も、気持ちは通じ合わないのではないかと思いました。そして、そのことに職員さんたちは慣れてしまって、気づいていないように思いました。

私たちの話をホーム長さんは職場で職員さんたちに話したとのことでした。それからMさんの様子は多少好転しましたが、職場の様子は大きくは変わっていないようです。分かったことは、職場に問題があるということでした。職員の数が十分でなく、短期間で辞めていく人が多いのです。Mさんは関係のできた職員が次々にいなくなるのが辛かったと思います。そのような職場で長時間働くのは苦痛です。仕方なく、Mさんは週当たりの勤務時間を減らし、余裕をもって働くことにしました。

このできごとから何が言えるかを考えてみました。

1) 制度の問題

現在の介護保険制度では、介護される方もする方も大事にされないということです。これは、この制度には大きな問題があることを意味しています。

2) 働くことをどう考えるかという社会の問題

働くということは、誰かに必要とされ、役に立つということです。必要とされ、役に立っていると思えなければ、人は生きている実感は得られません。職員が専門家として利用者さんを大切に思わなければ、利用者さんは職員を必要と思わないでしょう。また、職員同士が互いを必要とし大事に思わなければ、仕事は成り立ちません。社会がそのような職場を許し、職員もそれに慣れてしまうのは、社会に問題があると言わざるを得ません。

3) 職員支援の必要性

専門家は、社会から期待されていること、利用者さんから望まれていることを実行しなければなりません。しかし、専門家と言われる人の中には自分の役割がよく分かっていない人もいます。利用者さんが何を望んでいるか、社会から何を期待されているかを知るには、利用者さんが何を感じ、何を考えているか聴き、察することをしなければなりません。そのためには、講義、実習、グループワーク、カウンセリングなどによる他の専門家からの支援が有効だと思います。

4) 当事者から教わること

障がいをもつ人は、当たり前のことには気づかないこの社会に、当たり前のことには気づくよう教えてくれます。社会福祉とは、弱い人に支援をすることと考えられていますが、そうではなく、社会にとって大事な役割を果たしている人に、当然の報酬を与えるということではないかと思えます。便利なものを作って売る、技術を教えるというような仕事だけでなく、当たり前のことには気づくようみんなに教えてくれる先生の役割はとても大きいと思います。近年、障がいのある人の一般就労が奨励されていますが、一般就労の意味は、身近なところに大勢の先生を配置する、ということにあると思います。

2. 精神保健福祉士養成課程での体験

私は昨年4月に社会福祉士の資格を取得しました。この4月からは精神保健福祉士の資格取得のために、S大の養成課程に在籍しています。

夏には、休暇を利用して、作業所などで90時間の実習をしました。実習で出会ったどの方も個性的で魅力ある人物でした。障がい当事者の方々と時間をともにするう

ち、その方々が暮らす世界は私にとって馴染みの深いものであって、居心地が良いという嬉しい発見がありました。それは、私たちが目にしている現実の世界とは異なりますが、基底にある真実を感じさせるものでした。

実習では次のことを教わりました。

- 1) この社会には、何十年も入院生活を続け、ご家族との関係も断たれている人、就学時に発病し仕事の経験がないまま長期にわたって治療を続けている人、仕事をしてきた中で発病し、入退院を繰り返しながらもリワークを目指す人など、さまざま人が存在する。
- 2) 地域で暮らし、社会生活を営むためには、住居、食生活、通院、日中活動の場、電話、金銭管理をはじめ、能力や志向にあった仕事に就くこと、対人関係の構築や継続など、さまざまなことが必要となる。
- 3) 人はそれぞれ固有の価値を持ち、社会で必要とされ、生きていることに喜びを感じることができるはずである。このような本来あるべき状態（生きていることに喜びを感じることができる状態）をその人にもたらし、それをリカバリーと言うとすれば、専門家の役割は、それぞれの人のリカバリーのために、それぞれの人の内部状態と関わることであり、多職種間連携によって、個人と社会とのあいだを適切につなぐこと、そして、社会へ働きかけることである。

社会福祉 social welfare の welfare は、well-being、すなわち良く生きることです。社会福祉は、個別のケースの不具合から社会全体の考え方やシステムの不具合を指摘し、改善すること、この社会にどんな不具合があり、どうすればいいか先生としての当事者から教わること、さらに、専門家との連携により問題を解決するということです。これらによって、人はより良く生きることができ、こんなことを最近の2つのできごとから考えました。(阿部公輝)

海から海への設立当初から理事であった白井隆之さんが退任され、新たに粕谷富久代さんと山口ひろみさんが理事に就任しました。粕谷さんは保育士の資格をもち、40年以上布田にお住まいです。かつて調布の保育園の保育士さんでした。山口さんは、旧甲州街道沿いの商店の若おかみさんです。店内に、田中瑞木の絵が展示されています。

平成 21 年度会計報告 (単位：円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	124,000
2. 寄付金収入	304,000
3. 受取利息	208
経常収入合計	428,208
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1) 障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示	0
(2) 障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践	6,000
(3) 障がいをもつ人を中心とした交流の促進	45,000
(4) 芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育	103,592
(5) 障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援	0
(6) 活動に関する広報および成果の公表	294,429
(7) (1)～(6)の事業活動のための募金	0
2. 管理費	
経常支出合計	565,029
経常収支	△136,821
前期繰越	1,040,273
次期繰越	903,452

平成 22 年度通常総会

2010年5月30日

通常総会で次の役員が選出されました。任期は2年(2010年7月1日～2012年6月30日)です。

理事長	阿部公輝	副理事長	阿部愛子
理事	粕谷富久代	理事	高安幸子
理事	田中和己	理事	本間俊典
理事	山口ひろみ	監事	田中玲子

特定非営利活動法人 海から海へ
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp
 2010年10月2日 海から海へ No.25
 編集責任者 阿部公輝
 〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5
 マートルコート調布 407
 Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878
 発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21
 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会
 定価 200 円
 無断転載禁止